

≪自著紹介≫

史の会編『史の会研究誌 第6号 ～振り返りつつ、今をよむ～』
(2020年7月)

Fumi no kai kenkyūshi vol. 6 : furikaeritsutsu ima o yomu (Looking back, reading the present, volume 6 of the journal of the Kanagawa Women's History Research Group).

筆者は、2019年より神奈川県の地域女性史に取り組むふみ史の会に所属している。この度、会は研究誌第6号を刊行した。本号は人物特集である。聞き書きと評伝という形を取り、10人の女性を取り上げている。

1 史の会設立までの経緯と活動

史の会は1988年に創立され、2020年10月に結成満32年を迎えた。女性史研究家江刺昭子氏をリーダーに、明治から現代までの女性の問題を多角的に取り上げ、研究誌を刊行してきた。

史の会設立の背景には、1975年の国際女性年以降の女性施策の進展がある。神奈川は他県に先駆けて82年に女性プランを作り、同年女性の自立と社会参加の拠点として江の島に県立かながわ女性センター（2015年に閉館、現在藤沢市にある合同庁舎内にかながわ男女共同参画センター）を建設した。初代館長は評伝で取り上げられている読売新聞出身の金森トシエ。金森の下で、かながわ女性アカデミー講座（近代女性史講座）が開催される。聞き書きで登場する岡江が担当した。講座修了後、金森の肝いりで、受講生の中から神奈川の女性史を創るためのグループ・グループ江藍が組織される。女性史も本作りも初めて

のメンバー達が新聞記事などの一次資料収集、聞き書きといった作業をこなし、その地域に生きる女の目で歴史を捉え直していった。活動は『夜明けの航跡—かながわ近代の女たち』(87年)、『共生への航路—かながわの女たち'45~'90』(92年)の出版(いずれもドメス出版)へと結実する。2冊の持つ意義や独自の作成方式、女性史を学ぶ意味は、金森の章で詳述されている。

その間に専門委員として参加していた江刺から研究グループ結成の提案がなされ、会員14名の史の会が発足する。江刺によれば「メンバーは、若いとはいえないけれど、ゲンキな女たち」「妻として母として家庭を運営しながら、地域活動をやり、かつ勉強もめいっぱいやりたい女たち」¹であった。以後、各人が資料調査や取材を行い、月に1度の例会で報告を重ね、研究誌とともに、『時代を拓いた女たち』、『同』第Ⅱ集(いずれも神奈川新聞社)などを出版し、神奈川県にゆかりのある多彩な女性たちを紹介してきた。なお、現在会員は6名である。

2 本書の構成と概要

《聞き書き》

小野静枝 横浜の大空襲を記録し、のちの世に伝える

聞き手 江刺昭子

室谷千英 神奈川県の女性政策を担う

聞き手 中積治子

嶋田昌子 活動の始まりは本牧の海から

聞き手 安井恵子

岡江照子 かながわ女性センターで生涯学習を担う

聞き手 影山澄江

¹ 江刺昭子「刊行にあたって」『史の会研究誌』第1号、1991年7月。

小野は自身の空襲体験を原点に、「横浜の空襲を記録する会」などの活動で広く、深く、戦争の悲惨さを語り、記録した。戦災障害者の本作りの支援も行った。室谷は県の福祉職から県民部県民総務室にできた婦人班へ移動し、女性センター建設に携わる。初代の県民部婦人企画室室長や部長職を歴任し、初の女性副知事として女性団体と連携しながら女性施策の最先端を担った当時を語り、女性たちにエールを送る。嶋田は横浜で家庭文庫を立ち上げ、高校講師、社会教育指導員をしながら横浜・本牧に関する本の刊行に従事、生涯学習講座の延長から「洋館探偵団」「横浜シティガイド協会」などのユニークな活動を企画し、継続している。岡江は植民地台湾で生まれる。戦後神奈川県庁職員となり、社会教育課、県立図書館、定時制高校の教師を経て、女性センターの生涯学習事業を担当した。金森とともに女性の学習環境を整えた当時を振り返る。

《評伝》

高松ミキと座間村女子青年会の活動 —「熱と愛」で駆け抜けた10年—	伊藤めぐみ
横浜のベル・エポックの時代を生きる —西川千代の足跡—	中積治子
金森トシエが求めた男女平等社会 —ジャーナリストとして、行政官として—	江刺昭子
能楽師富山禮子の世界 —女性能楽師の歴史を切り拓く—	影山澄江
西條節子の華麗な「終活」 —学び・創り・住む—	三須宏子
牧野薊と牧野家の女たち —横浜開港以来の国際派一族—	安井恵子

高松は1922年から約10年にわたり座間村女子青年会を「熱と愛」をモットーに指導し、模範女子青年会として県・文部大臣から表彰されるまでに育てる。

その活動実態を明らかにし、問題点を探る。西川は横浜の西川楽器店店主と結婚し、1910年代社交界で注目される。その人生の変遷を時代の変化と一族との関わりも含めて追った。初代神奈川女性センター館長金森は8年にわたり多彩な活動を展開した。読売新聞記者時代の活動、館長時代の業績を検証し、一貫して女性問題に取り組んだ姿を描く。藤沢市で暮らす富山は、女人禁制の伝統の長い能楽界で女性能楽師として初めて2004年重要無形文化財に指定された。厳しい修行や差別、家庭との両立の難しさを乗り越え、女性能楽師の世界を切り拓いた。西條は42歳で藤沢市議となり福祉政策に取り組み、障害者の自立や暮らしを学ぶ海外視察を行う。その中で出会った高齢者たちの姿に刺激を受け、仲間を集め高齢者の自立と共生を目指したグループホームを立ち上げた。牧野は、イギリス人をルーツとしたインターナショナルな一族の一員である。36年満州の奉天で生まれ、戦後は横浜で育つ。中国人の夫と結婚、1960年から香港に移る。異文化や姑達との葛藤を乗り越え、ジャーナリストとして活動している。あわせて海外を行き来した牧野家の女性たちの群像も描く。

10人の人生のプロセスは様々であるけれども、時代の制約や規範にとらわれず、各分野で先駆的、かつユニークな活動を展開していく。また、金森、室谷、岡江の章から1975年の国際女性年を契機とした神奈川県における女性施策の展開過程を具体的に知ることができ、貴重であると感じている。最後に置かれた「女性史とわたし」では、会員たちが、女性史との出会いとその意味を各々の自分史と重ねて述べている。

若い女性に是非お読みいただきたい。